

平成十二年四月二日(日)

郷土研究会資料

第二七六回 史跡めぐり

花に誘われて

内濠を歩く

越谷市郷土研究会

第二七六回 史跡めぐり 案内

日時 平成十二年四月二日(日)

集合 越谷駅東口 午前九時

行先 花に誘われ 内濠を歩く

コース 越谷駅↓茅場町駅(乗換)↓九段下駅

牛ヶ淵公園：善書調書跡・他

九段坂：常灯明台・他

北の丸公園：田安門・武道館・他

千鳥ヶ淵公園・半蔵門

昼食(屋外にて食事)

千鳥ヶ淵戦没者墓苑

靖国神社

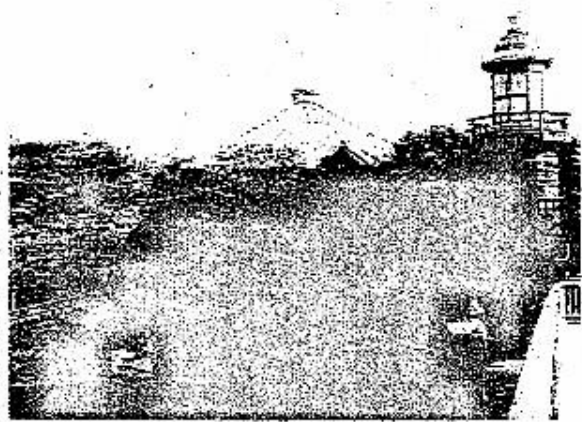
九段下駅↓茅場町駅(乗換)↓越谷駅

案内者 理事 山田 政信

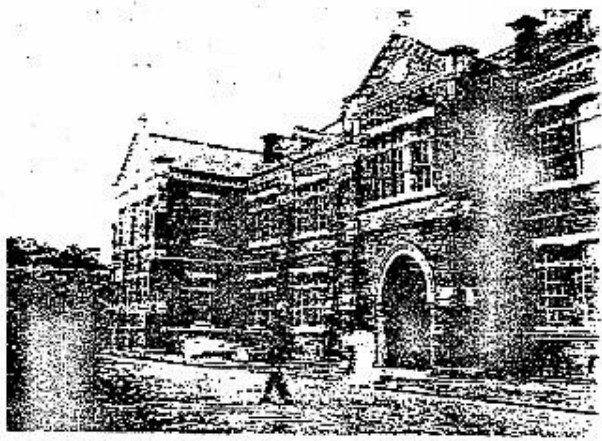
参加費 金一五〇〇円

(含む交通費・資料・保険料・他)

主催 越谷市郷土研究会



靖国通りから高徳社と日本武道館



日本武道館

著書調査跡

幕府は、洋学研究の必要から安政二年（一八五五）江戸神田小川町（現三崎町）に洋学所を設け、翌三年九段下の竹本図書館正雅の上屋敷を著書調査とすることとなった。外國事情を調査し、旗本の子弟に洋学の就学を許した。官許洋学の発祥地である。

後、小石川門内に移り、さらに一ツ橋門外に移り洋学調査と改称、さらに東京開成学校などと名をかえ、明治十年四月、本郷に移って東京大学の文・理科となった。

講義の内容は蘭学を主としたが、やがて英・仏・独語科をも新設し、西洋の新しい学問の教育、研究も行った。当初、聴講生は幕臣旗本の子弟であったが、諸藩士をも教育し、さらに一般有志の聴講も許した。

愛国婦人会発祥地

奥村五百子は愛国婦人会の創立者として知られている。佐賀県唐津生まれで、若い頃から討幕運動に参加、維新後も国事に奔走している。明治三四年近衛篤磨や華族婦人の援助で、出征軍人遺家族、戦勝病兵の援護を目的とした愛国婦人会を設立、満州に渡り将士を慰問した。明治四二年大日本婦人会に統合され、第二次大戦まで愛国思想普及に活動した。現在は銅像にかわり、千代田図書館入口脇に碑が建てられている。「愛国婦人会発祥の地、奥村五百子刀自銅像跡の為之を建つ、昭和三十年秋奥村刀自法要会」と記されている。

弥助砲

明治時代、大山巖元帥（旧名弥助）が、明治十八年に考案、村田統の発明者、村田経芳陸軍少将に作らせた大砲の砲身である。

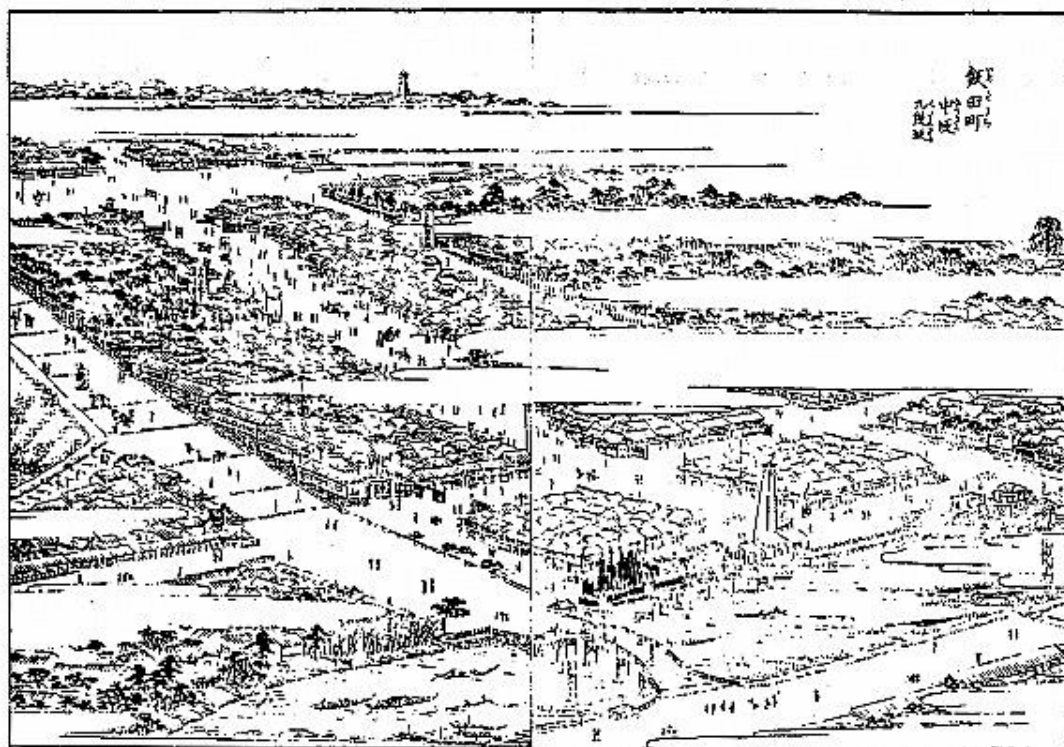
【九段坂】

九段坂は『東京名所図会』によると「九段坂は富士見町の通りより飯田町に下る長阪をいふ。むかし御用屋敷の長屋、九段に立ちし故九段長屋とひしよりこの阪を九段坂といひしなり、今は斜めに平なる阪となれるも、もとは石を以て横に階をなすこと九層にして、且つ急峻なりし故車馬は通すことなかりし」とある。

江戸名所図会に載る図を見ても、之を知ることがができる。

この坂上は、江戸時代から観月の名所として知られ、二六夜待ちと称し、坂上で月の出を賞したという。

（坂の途中から望む牛ヶ淵、土手石垣、田安門の美しさは、区内でも有数かと思われる）



## 〔常燈明台〕

明治四年靖国神社（当時は東京招魂社）に祭られた霊のために建てられたといわれている。初めは靖国神社前偕行社（現住宅公団の前あたり）の構内に築造された。台石は当時の各藩からそれぞれ拠出されたと伝えられている。

この常燈明台の灯りは品川沖に出入する船ばかりでなく、遠く房総からも望見されたという。昭和五年道路改修に伴い現在地に移した。明治調を残している建造物として珍重されている。平成元年より約一年を費やし、旧の姿に復元した。

## 〔北の丸公園〕

天正十八年（一五九〇）に徳川家康が、小田原平定を終えた豊臣秀吉から関東轉封を通告されたころ、中世期から太田道灌が江戸湾に面した台地に江戸城を築いたとはいえ、そこは荒れ果て、葎吹きの家が百戸あるかなしかといった辺鄙な状態であった。

家康の江戸入府は、その年の八月一日とのことであるが、このときより江戸城の新規模築城が始まり、日本の中世はここから始まったといつてもよい。だがその頃は秀吉の天下平定の余波がまだのこって大規模な築城ができる環境でなく、江戸築城といっても修築か改築の程度のものであった。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦をへて、慶長八年（一六〇三）に家康が征夷大將軍に任ぜられ、江戸が実際に日本の政治の中心となると、江戸城前面の江戸湾沿岸を埋め立てはじめた。本格的な築城が始まったのは、慶長十一年（一六〇六）で、縄張りには藤堂高虎が担当し、工事の分担は諸大名に割り振られた。天守閣が完成したのはこの時期である。この北の丸公園を囲む千鳥ヶ淵・内堀通りに面した半蔵濠、日比谷濠などの内堀が江戸城内郭を囲んだのは慶長十九年という。更に外堀も整い、巨大な江戸城が完成したのは三代將軍家光の寛永十三年（一六三六）であったという。

江戸城の北の丸と呼ばれたところ、こあたりはかつて代官衆の屋敷があったことから、代官町と呼ばれていた。が、後に、この地には春日局や、家光の弟である駿河大納言（徳川忠長）の屋敷が建てられた。

ところで、徳川忠長といえは悲運な生涯を終えた人物として知られている。

駿河大納言・忠長は、家光の二歳年少の同母弟である。秀忠夫妻にたいへん可愛がられ、一時期は、家光を差し置いて世嗣になりそうなほどであった。元和二年（一六一六）、忠長は兄の家光と同じ日に元服し、甲斐國を与えられた。寛永元年（一六二四）には、さらに駿河國・遠江國を加増され、あわせて五十五万石を領する大名となった。とくに駿河の地は、家康が晩年を過ごしたところで、その場所に配されたということからも、当時の忠長の地位が知れようというものである。ところが、寛永八年、突如として忠長はすべての領地を没収され、甲斐國へ蟄居させられたのである。家臣を理由もなく手討ちにしたという不行跡が原因とされた。

同九年正月、秀忠は病死するが、それから三ヶ月後、忠長は謀反の疑いによって高崎に移され、幽閉の身となった。翌十年十二月、将来を悲観した忠長は、二十七歳で自刃したという。

忠長を死に追いやった張本人は、將軍家光だとの通説もあるが、厳密に言えば、忠長を追い詰めたのは、秀忠であったという説もある。

北の丸は忠長の無念と怨嗟の声を秘めたまま、昭和四十四年に一般に開放され、北の丸公園として今日に至っている。

47年 東京文化財

【近衛師団司令部庁舎跡】

明治の香りを残す、東京ではすっかり少なくなった建物の一つで、内装もすっかり模様替えして昭和五十二年から「東京国立近代美術館工芸館」として再スタートした。  
この建物は明治四十三年陸軍技師田村鎮の設計になるもので、レンガ造り、二階建、スレート葺簡素なゴシック風で、大正・昭和を経て現在に至る。明治洋風建築としては代表的な存在である。関東大震災や第二次大戦をくりぬけ、ほぼ完全な姿をとどめている。  
丸の内の赤レンガ、旧帝国ホテルなど姿を消した今、貴重な建物である。  
昭和三十八年頃、建設省が北の丸一帯に、森林公園をつくることからはじまって、建設省、文化庁、文化財保護関係者、公園管理関係の厚生省、防衛庁、所有者の大蔵省などが、とりこわしをめぐって、争われたことは、ご記憶の方も多いと思います。

【半蔵門】

半蔵門前から左右の風景のすばらしさはまた格段であり、春秋を問わず、また、雪の朝などはなんともいえぬ美しさである。  
半蔵門は、服部半蔵の組屋敷があったのでこの名がついたといわれている。古くは「かふじまち口」といって国府（府中）へ行く道の出発点であったという説がある。  
江戸時代から明治末までこの門を入れて竹橋へぬける道があった。現在の通称代官町通りは明治四一年から今の道が作られている。江戸時代山王祭の山車がこの門を通過して、將軍の上覧に供したものであるという。門内は現在吹上御苑であるが、築城後は江戸城の控地となった。  
今は宮中三殿、御府、生物学御研究所などがある。  
半蔵門は、昭和二〇年五月撤廃、後、現在の規模に再建した。

初代がつくり二代目が潰した服部家

初代・服部半蔵正成マヤテリ

天正十年、本能寺の変が起った時、徳川家康は堺にいた。僅かな家臣しか引き連れていない家康は、明智光秀の軍勢を恐れ、堺の地に孤立することになる。この窮地を救ったのが服部半蔵である。堺から険しい山道を越え、領地の岡崎を屈指した伊賀越えのおり、半蔵率いる伊賀者たちは、必死の思いで三河へ急ぐ家康一行を警護した。この時の功績が、家康江戸入城の際、幕府のお抱えとなり、伊賀組同心の地位を得ることになり、半蔵自身も八千石の旗本となる。

二代目・服部半蔵正就マヤテリ

忍者集団の組織は上忍・中忍・下忍の三つの位がある。服部家は代々上忍を務める家柄である。二代目を襲いだ半蔵正就は、現場の空気を知らないし知ろうともしない。忍者の何たるかを、全く理解しようとはしなかった。自然と部下の伊賀組同心たちは二代目半蔵を侮るようになる。正就はそれが面白くない。報復として、隠密から外し、家屋の修理や庭園の管理とかつまらない仕事を、部下の伊賀組同心たちに命じた。老練な忍者たちは、公然と二代目半蔵に対して叛旗をひるがいた。幕府は伊賀組の肩を持ち、半蔵から伊賀組支配の座を取り上げた。正就は汚名挽回を期し、大坂夏の陣に参加するが、討ち死にを遂げ、服部家は断絶。服部半蔵の名は失われた。



## 【千鳥ヶ淵公園】

半蔵門にむかって左側堀ばたに沿って千鳥ヶ淵公園があり、ここには「麹町高等小学校の碑」、  
「自由の群像」その他がある。

半蔵漆、桜田漆に面した道路を内濠通りと称している。千鳥ヶ淵公園の西側、一番町一番地に英  
国大使館があり、大使館前は桜並木でも有名であり、現在は指定を解かれてしまったが、一時期は  
東京都の史跡に指定されていたことがある。英国公使アーネスト・サトウがここに桜を植えて、明  
治三十年頃、東京市に寄贈した。今も同大使館の前に何本かの老樹をみることが出来る。

千鳥ヶ淵は漆の形が千鳥に屈折しているからとも、千鳥が羽を広げた形に屈折しているからその  
名がついたともいう。現在、千鳥ヶ淵と半蔵門とは土手で区切られ別々の漆のようになっていたが  
、もともと両漆は続いていたもので、通称代官町通り（旧通りは城内を半蔵門へ抜けていた）を現  
在のように作りかえたとき二つの漆にわけられてしまったのである。なを初期の江戸下町の用水は  
この千鳥ヶ淵の水を用いたともいわれている。

## 【千鳥ヶ淵戦没者墓苑】

戦没者墓苑は唯一の無名戦士の墓である。第二次大戦の主戦場から収集された遺骨約九万一千体  
が納められているという。墓の本屋は六角堂で、地下は六つの部屋に分かれ、二四の納骨壺がある  
といわれている。また、中央の陶棺中には昭和天皇御下賜の金銅製の御骨壺が納められている。昭  
和三四年竣工し、両陛下ご臨席のもと追悼式が行われた。

【靖国神社】

桜の名所の一つとして知られる靖国神社境内は、もと三番町原といった火餘地、騎射馬場などといわれたところであった。靖国神社は明治二年（一八六九）六月、当時の三番町歩兵屯所跡に招魂社として創建された。当時は各地で国事にたおれた人々の慰霊祭が行われ、私招魂社の創建がみられた。

このようなときに、国事で殉じたものの霊を国において永く祭祀を行なおうと、明治元年に大政官布告が出され、この布告のもとに、大村益次郎が中心となって九段上に建設されたものである。明治十二年（一八七九）六月四日別格官弊社に列するとともに、靖国神社と改称された。それでは参道入口からみてゆくことにする。

大燈籠 ； 明治十二年に造られ、右は「揚輝」、左は「照闇」と刻まれている。  
石獅子 ； 左右一対をなして並ぶ。「東京名所図会」によると

二十七・八年の役に遼東より捕獲し来るものなり  
雄獅子の台石に、大清光二年閏五月初六日敬立

雌獅子の方に、直隸保定府深州城東北得朝村弟子李永成敬献石獅子一対と刻せりとある。

大鳥居 ； 神明造り、高さ二五米・笠木の長三四米・柱の径二・五米

石燈籠群 ； 旧華族の献じたもので、献納の年も刻まれている。その数六〇余。

慰霊の泉 ； 戦場で水がなくて苦しんだので、豊かで清い水を捧げようと、奉納された。

大村益次郎像 ； 東京三銅像の一 鑄造者は大熊氏広氏

昭和十年造立の石塔 ； 右側 日本海海戦三笠艦上の東郷元帥の図他七図

左側 明治三八年戦役の際の奉天入場の図他七図

宝物遺品館（旧遊就館）

〔田安門〕

この門が創られた年代は明確ではないが、高麗門の扉鈞具に次のような銘が刻まれている。

「寛永十三丙子曆九月吉日九州豊後住人御石火大工（大砲鑄造者）渡辺石見守康直」

この寛永十三年は江戸城総曲輪の大工事を行った年で、田安門もこの時修復したと考えられる。門内は田安台といって、はじめは百姓地で、田安大明神があったという。江戸城経営後は北ノ丸と称し、代官屋敷や大奥に仕えた女性の退隠所となった。有名な千姫や春日局などの屋敷などもここにあった。（現 科学技術館前の一角といわれる）

享保十五年（一七〇三）八代將軍吉宗の第二子宗武は、ここに一家を創立して、田安家を興した。また宗武の子松平定信（白河業翁）は、この地で生まれている。

参 考 図 書

- |              |          |
|--------------|----------|
| 千代田区史跡散歩     | （株）学 生 社 |
| 東京都の歴史散歩     | （株）山川出版社 |
| 江戸いまむかし謎とき散歩 | 広 濟 堂出版  |
| 東京江戸謎とき散歩    | 広 濟 堂出版  |
| 歴史と文化の散歩道    | 東京都政策報道室 |

